

かわ たま
川へおちた玉ねぎさん

むらやま かずこ
村山 籌子

ある町にジャガイモ・ホテルという宿屋がありました。主人というのが、ジャガイモだったからです。

主人のジャガイモさんは大変親切な人だったので、このホテルにはお客様がいつも多すぎて、どうかすると、一晩に、二人や三人のお客様をことわらなければならないこともありました。

ある夕方、もう、この上一人のお客様も泊めることができないほど、満員になりましたので、「満員になりましたから、お気の毒でも、今夜は、どなたもお泊めできません。」という大きな満員札をジャガイモさんは、ホテルの入口にかけようと思いました。すると、そこへ、立派な玉ねぎの紳士がやって来て、ジャガイモさんに言いました。

「どうか、ジャガイモさん、私を泊めてください。大変つかれていますから。」

ジャガイモさんは、お気の毒に思いましたけれども、空いている部屋がないので、

「お気の毒ですけれども、何分、もう満員になってしまいましたから。」とことわりました。

けれども、玉ねぎさんは、朝から遠い道を歩きつづけて、くたくたにつかれていますので、この上歩くことができません。

「馬小屋でも、屋根裏でも、どこでもいいから、どうぞ泊めてください。」とたのみました。

そこで、ジャガイモさんは考えました。犬さんや、お猫さんならいざ知らず、玉ねぎさんを馬小屋になんぞ泊めたら、いやしんぼの馬が、玉ねぎさんを食べってしまうだろう。屋根裏に泊めたら、遠慮なしのくもが巣をかけるだろう。ジャガイモさんは大変困りましたが、地下室のことを思い出して、「では、地下室でも、よろしければお泊めします。」と申しました。

玉ねぎさんは大変よろこんで、泊めてもらうことにしました。そして、ジャガイモさんに案内してもらって、地下室に行きました。

そこは、真くらで、何にも見る事ができませんでしたので、玉ねぎさんは手さぐりで、小さいベッドを見つけて、そこへ横になるなり、ぐっすり寝込んでしまいました。

すると、不思議なことに、そのベッドが少しずつ、コットン、コットンと窓の方へ動き初めました。そして、窓ぎわの所まで来るといっしょに、ベッドは、急に、パンとひっくりかえって、そのはずみに、玉ねぎさんは、窓の外へ投げ出されてしまいました。

ああ、皆さん、窓の外には、何があったかごぞんじですか。窓の外には、大きな川が流れていたのです。玉ねぎさんは、あっ、と言う間もなく、川のなかへ、ぎぶんとおっこちて、見ているうちに、水のなかへ沈んで見えなくなってしまいました。

かわいそうに、玉ねぎさんは、野菜の皮を外にすてるために、こしらえてあった、電気仕かけの箱をベッドとまちがえて、そのなかにはいって寝ていたのです。

しかし——そのうちに、夜が明けました。

朝になったので、ジャガイモ・ホテルの主人のジャガイモさんは、地下室へ、パンと紅茶を銀のおぼんにのっけて、来て見ますと、昨日の晩に、とまったはずの玉ねぎさんの姿は、影も形もありません。玉ねぎさんの持って来たトランクが、のこっているだけでした。

ジャガイモさんは、大変に心配して、早速新聞社へ行って、次のような広告を出してもらいました。

「キノウノバン、私ノウチノ地下室ニトマッタ玉ネギサンガ、行方不明ニナリマシタ。オ心アタリノ方ハ私ノトコロマデオ知ラセクダサイ。知ラセテ下サッタ方ニハ、オ礼ヲ一円サシアゲマス。ジャガイモ・ホテル。」

すると、その日の夕方、ひょっこり、昨日いなくなった玉ねぎさんが帰ってきました。

ジャガイモさんは、

「まあ、よく帰ってくださいました。どんなに心配したか知りません。」と言いましたので、玉ねぎさんは、どんなに、ベッドから川のなかへ落ちたか、そして、どんなに、あわてておよいで岸に這い上がったか、そして、岸の上で、新聞の広告をよんだかを話しました。すると、ジャガイモさんは頭をかいて申しました。

「それは、まことにお気の毒なことをいたしました。その代わりに、今晚は、とても、素晴らしいお部屋があいていますから、泊ってください。」と申しました。

玉ねぎさんは笑いながら言いました。

「ああ、僕がもう一日おそく、ここへ来たら、昨日のような、ひどい目には会わなかったよ。」と申しました。

けれども、不思議なことに、玉ねぎさんは、ひどく、このジャガイモ・ホテルが気に入ってしまって、一生涯、この、ジャガイモ・ホテルの番頭さんになって、ジャガイモさんといっしょに住むことになりました。

それですから皆さん、あなた方のめしあがる洋食で、ジャガイモのついているお皿には、きっと、玉ねぎがついているでしょう。それは、こんなわけです。

そのあくる日から、ホテルの看板が、こんな風にかき換えられました。

「ジャガイモ・玉ネギ・ホテル」と。